『逆修説法』と『三部経釈』

―特に浄土宗論に関して―

研究生　安孫子　稔章

『逆修説法』と『三部経釈』（『無量寿経釈』・『観無量寿経釈』・『阿弥陀経釈』の三書を指す）は法然上人（以下、祖師の敬称略）の代表的な教義書でありながら、ともに法然の説法録であってその著書ではなく、またその成立を示す明確な史料がないという共通点を持つ。本論では両書に説かれる浄土宗所依の経論及び教判についての説示を比較検討し、その成立の背景について考察したい。

まず、浄土宗所依の経論についての両書の説示を比較すると、『逆修説法』では初七日で『無量寿経』・『観無量寿経』・『阿弥陀経』を浄土三部経とする旨を述べた後、三部経という呼称が他宗でも使われることを述べ、極楽往生を説く経典の中でこの浄土三部経に及ぶものはないとする。一方、『無量寿経釈』では『無量寿経』を往生教の根本として讃嘆してはいるものの、三部経に関する言及はない。また、『無量寿経釈』の後で説かれたと考えられる『阿弥陀経釈』の中には浄土三部経をもって所依とする旨とその典拠が述べられる。これより『逆修説法』時点において、浄土宗所依の経論を明確に提示し、一宗派として確立しようとした法然の意図が窺える。また『阿弥陀経釈』に見られる浄土三部経の典拠の列挙は、法然による所依経論確定に至るまでの過程とも見て取れるが、この部分は後世の加筆であるとも見られており、検討が必要である。いずれにせよ、三部経の講説が行なわれている時点で三部経という概念があったことは確かであり、両書間で浄土三部経を所依とする法然の宗論に大きな相違はないと私は考える。

次に浄土宗の教判についての両書の説示を比較すると、『逆修説法』では初七日で浄土宗という宗の名を立てる典拠を述べ、続いて教えには浅深と広狭があるとし、浄土の法門のみが今時に機と教が相応する教えであるとする。さらに六七日で諸宗の教判について述べた後、浄土宗の教判は道綽『安楽集』所説の聖浄二門判であるとし、諸宗の法門について説明している。一方、『無量寿経釈』では諸宗の教判について述べた後、浄土宗は道綽の聖浄二門判に依るとし、末代末断惑の衆生は往生浄土に依って生死を出離すべき旨を述べている。これより、聖浄二門判と機教相応のことは両書に共に説かれているが、特に『逆修説法』においては宗名を立てる根拠と諸宗の法門について明確に述べるなど、他宗からの視線を意識し、しっかりとした宗論を形成しようとする姿勢を見て取れる。また『逆修説法』初七日で法然は教判について触れず、六七日において初めて説いている。これは説法の聞き手である外記禅門及び門弟たちに対し、初めから浄土宗門ばかりを学ぶのではなく、広く一切経を学んでからより深い造詣をもって浄土門に帰入して欲しいと考える法然の説示意図の表れではないかと私は考える。